

# 私立中学への選好の高まりは学力面における

## 公教育への不信が原因か

### ～首都圏の中学受験事情から考察する近年の受験増加の背景～

福島侑大 (経済学部3年)

指導教員：安田宏樹

#### 要旨

日本において、中学校は義務教育に当たるため、受験をしなくても中学校への進学が出来る。しかし実際には私立中学受験が存在し、その数は無視できない数となっている。たしかに、開成、麻布、栄光、桜陰などの名門中学になれば、大学受験への先行投資としてのブランドがあるので受験させる価値はある。しかし、実際には偏差値 50 を切る私立中学も存在している。そのような私立に対して上記の学校と同じ理由で私立受験をさせているとは考えにくい。

では、なぜ保護者は受験をせずとも公立中学に行くことが出来るシステムになっているにも関わらず、私立に通わせたいと思うのだろうか。その原因として、よく指摘されるのはゆとり教育と呼ばれるカリキュラム変更などの教育政策の影響である。

たしかに、カリキュラムの変更と言うのは公立教育への不信感を強める要因とはなったかもしれない。しかし、実際のところ私立受験への熱というのはそれ以前からも起きている。加えて、進学実績などのブランドを持たない私立中学校が多く存在することからも、学力的な視点のみでこの原因を説明するのは無理がある。つまり、学力以外の観点から私立中学校を選好するケースが存在している可能性は十分にあるといえる。そこで今回は近年の私立受験が増加している背景を見た上で、私立中学校への選好の高まりについて考察することにした。その中で、範囲を首都圏に絞った理由としては、筆者が確認する中で良質なデータの蓄積が首都圏のみしか見つける事が出来なかったためである。全国の傾向については今後の研究課題としたい。

第1章では私の問題意識と私立中学受験が抱えている現状について言及していく。具体的には私立と公立の学校で、どのような差があるのかについて比較、検討を行う。その上で、現在の私立中学受験

の状況はどのような過程を経てきたのかについて考察する。

第2章では私立受験についての先行研究の内容の紹介を行う。ここでは、教育の経済学の考え方に  
関するものと今回の私立受験に関する先行研究をいくつか紹介する。

第3章では実際に複数の仮説をたて、それに対してデータや傾向等の分析を行う形式で仮説検証を  
行う。

第4章では、第3章での現状の分析を踏まえて、今後日本の教育政策はどのような方向性に向かっ  
ていくべきなのかについて、上記の検討を踏まえて本論文のまとめを行う。